

令和3年度

全国消防団員 意見発表会

報告書

令和4年3月 消防庁



目次



意見発表

宮崎市消防団	酒匂 浩司	1
杉並消防団	菊川 敬子	3
伊予市消防団	田頭 孝志	5
館山市消防団	川名 まひろ	7
南魚沼市消防団	岡崎 理香	9
金沢市第三消防団	奥村 悠祐	11
南アルプス市消防団	橘 博史	13
大町市消防団	奥村 照美	15
鈴鹿市消防団	中川 洋香	17
大東市消防団	武内 義幸	19
神山町消防団	坂井 義隆	21
宇佐市消防団	川谷 賢	23

審査員講評

塩野 裕氏	27
青山 佳世氏	28
大坪 悦郎氏	29
蝶野 正洋氏	30
山本 みゆき氏	31

令和3年度 全国消防団員意見発表会

賞	都道府県	所属消防団	発表者
最優秀賞	宮崎県	宮崎市消防団	酒匂 浩司
優秀賞	東京都	杉並消防団	菊川 敬子
優秀賞	愛媛県	伊予市消防団	田頭 孝志
優良賞	千葉県	館山市消防団	川名 まひろ
優良賞	新潟県	南魚沼市消防団	岡崎 理香
優良賞	石川県	金沢市第三消防団	奥村 悠祐
優良賞	山梨県	南アルプス市消防団	橘 博史
優良賞	長野県	大町市消防団	奥村 照美
優良賞	三重県	鈴鹿市消防団	中川 洋香
優良賞	大阪府	大東市消防団	武内 義幸
優良賞	徳島県	神山町消防団	坂井 義隆
優良賞	大分県	宇佐市消防団	川谷 賢

最優秀賞及び優秀賞を除き建制順



ギャップ ～団員が求める消防団とは～

宮崎県 宮崎市消防団

酒匂 浩司

私は、濡れた活動服から携帯電話を取り出した。「これが最後のメールになるかも知れない。もしもの時には子供たちを頼む。」妻あてにメールを送る準備をしながら、濁流を眺めていた。

平成17年9月7日、台風14号襲来による河川水位監視の任務に就いていた私は、堤防越水の危険を察し、冠水による通行止めを知らせる交通整理員と川岸近くに住む高齢者夫婦を誘導し、橋の欄干に避難していた。すでに辺りは水没し、目の前にあった公民館は、屋根しか見えない。荒れ狂う水は、欄干まで1m余りの所まで迫り、雨は、いつ止むとも知れない。

午前11時頃、水位の下降が見え始める。助かった…。その日の夕方、私たちは救出された。

台風14号は、秋雨前線の停滞に加え、台風本体の雨が重なり、宮崎県内の広い範囲で大雨を降らせ、大水害をもたらしました。約4,000世帯が浸水による被害を受けましたが、死者は1人も出ませんでした。この奇跡の裏側には、地域の街並みや地形を熟知した消防団員の活躍があったことは言うまでもありません。しかし、土のう積みや住民の避難、水位監視など、危険が伴う作業のほとんどを消防団員が担っており、一歩間違えれば消防団員が被害者になりかねな

い大災害でした。

災害現場に限らず、各種訓練や消防出初式など、大人数で一つのことを成し遂げる消防団のマンパワーは心強く、勇壮さも感じます。しかし、長い歴史の中で培われた消防団の風潮と、今の団員の求める消防団像について、ギャップを感じざるを得ないのです。

消防団員は自分の仕事を持ちながら、災害への対応や訓練、防火広報、消防出初式などの式典、また、野焼きの警戒や防災イベントなどの地域活動にも参加し、その多くは休日や夜間に行われます。自分が動ける時間に、自分にできる範囲で参加する一般のボランティア活動と異なり、消防団は組織として活動するため、時には過酷で危険な活動も伴います。自分や家族との時間を削り、消防団活動に従事することについて、「崇高な使命感」とか「地元愛」などの一言で片づけて良いのでしょうか。

現在、私は、宮崎市消防局総務課消防団係で勤務しています。時代に見合った消防団とはどうあるべきか、消防団員の生の声を聴くために、一般団員約2,500名を対象としたアンケート調査を行い、84.58%と多くの団員からの回答をいただきました。

消防団に対し、肯定的な意見がある一方で、60%以上の団員が「辞めたいと感じたことがある」と回答し、「本当は辞めたいが新入団員が入らないため団員の交代が進まず辞められない」という本音を痛感しました。また、消防団の飲み会においては、酒に酔った先輩からの叱責や、飲むことへの強要をやめてほしい、食事会など飲み会以外のコミュニケーションを求める意見があり、若い団員ほど、その傾向が強く現れていました。「消防団に入ったからには当たり前」と感じる方もいらっしゃると思います。しかし、若い団員の感覚をもっと大事にしていかなければ、団組織そのものの存続に関わると感じています。

実施したアンケートの目的としては、宮崎市消防団の現状を把握し、問題点や改善策を洗い出すとともに、消防団員の確保を図ることにあります。「団員としての自分を見直す機会になった」などの肯定的な意見もあり、団員個々の意識の向上と、今後の消防団活動へのモチベーションアップに繋がることを期待しています。

平成25年に「消防団を中核とした地域防災力の充実強化に関する法律」が施行され、名前のとおり地域を守る要として、私たちはこれからも充実してい

なければなりません。宮崎市消防団では団員確保ワーキング部会を設立し、アンケート調査の分析をもとに、各分団から選出された熱意のある団員とともに、入団しやすく活動しやすい消防団のあり方について検討を重ねています。

10年後、20年後にも、現在と同様に力強く、団結した消防団であるために、団員一人一人が意識を高く持ち、疑問と向き合い、新しい世代に消防団を繋いでいきます。



災害大国日本で 被災者0（ゼロ）の奇跡！ をめざす！

東京都 杉並消防団

菊川 敬子

「えっ!地震・・・?」と思った瞬間、ガーンと突き飛ばされたような衝撃と同時に、本棚や机は大きな音を立て暴れ出しました。

東日本大震災。学部卒業間近の2011年3月11日、私は岩手大学の研究室で被災しました。

ライフラインが途絶え、スーパーからはモノが無くなり、家族とも連絡が取れず、避難所に身を寄せました。

友達の携帯で見たニュース映像に絶句し、涙があふれました。

津波。一瞬にして、建物も道路も、人も街も、悲痛な叫びとともに丸飲みにし、かつて私が見た美しい三陸海岸の街並みは在りませんでした。

被災直後、自衛隊・消防署と連携した「消防団」の昼夜問わずの献身的活動は、映像や活字を通して、強く私の心に残りました。

5年後……。東京に越した私は、地元阿佐ヶ谷の分団長の紹介で杉並消防団に入団し、積極的に多くの活動に参加しました。防災訓練、応急手当、広報、台風警戒、本番さながらの水防訓練。

実際の火災にも4回出動しました。

黒煙とともに燃え上がる炎、鼻を衝く匂いに、恐怖しながらも必死で消火活動を行いました。

応急手当指導員の資格を取得し、東京オリンピックで役に立てばと思い、手話を学び、半年間の語学留学もしました。

三年前、選手として参加した消防操法大会では、嬉し涙の金メダル。繰り返し、繰り返し行われる訓練ではチームワークの大切さ、操法の奥の深さを学び、この消防団活動を広く啓蒙しなければ、という強い念いを持つようになりました。

「消防団」という言葉の響きから、消火活動だけの印象を与えがちですが、その活動は多岐に渡ります。そして、「災害大国」に暮らす我々日本人にとって、その活動と存在意義は重要です。

しかし、少子高齢化、人口減少、雇用形態の変化等から、「消防団員の減少と高齢化」は、災害時に「救える命」に苦渋の順位を付けるという、厳しくも悲しい現実を広げようとしています。

また、新型コロナウイルス感染症で生活環境が大きく変わり、私たち消防団の活動も縮小せざるを得ない状況になりました。

しかし、どのような状況下であっても、いつ火災や自然災害が起こるかわかりません!

近年、日本各地で起こっている自然災害に加え、コロナウイルスに象徴される「防疫対策下での対応」も必然となっているのです!

これら重要課題解決には、国民一人ひとりが、意識を高め、地域防災力の必要性を理解する取組みが大切になってきます。それにより、地域防災の担い手が増え、消防団の維持・強化・活性化はもちろん、日本の防災力の向上に繋がります。

そのため私は、一人ひとりが命を守る術（すべ）を身に着けるため、学校教育に「防災」を主要科目として取り入れることを提起します。

「防疫」を含めた「新しい防災」の在り方を理解し、予測・備え・点検訓練といった防災上の危機管理を、学校教育を通して教育・訓練するのです。

つまり、環境の変化に合わせて改善し続け、防災の知識と技術、技能を子供の時から身に着けるのです。

やがて、それは減災に繋がり、緊急対応、復旧・復興など収束の局面においても大きく貢献できるでしょう。

そして広く環境問題に対する興味・活動へと繋がり、更に世界の教育システムにおける規範（スタンダード）のひとつとして、改善・発展し続けるシステムになり得ると考えます。つまり、我々消防団の活動は、「持続可能な開発目標（SDGs）」へと繋がるのです。

その第一歩として、防災リーダーである私たち消防団員一人ひとりが新しい防災を考え、行動・発信し、進化して行くとともに、受け継いだ技術と念いを次世

代に繋げていくのです！

意志ある処に、道は開くのです！

国民みんなで学び続け、“災害大国日本で被災者0（ゼロ）の奇跡を私は見たい！”



気象災害から命を守る ために私たちが できること

愛媛県 伊予市消防団

田頭 孝志

私の記憶の原点は「雨」です。記憶を遡っていくと最終的には、父が運転する車のフロントガラスに付着する雨粒の大きさが違うことに興味を持って眺めていた自分がいます。それから私は天気に興味を持ち、小学生になると雷が鳴れば雷を追いかけ、雨が降れば雨雲を追いかけ、台風が発生すればテレビの天気予報にくぎ付けになる日々を過ごしていました。

大人になった私は、小学1年生のときから夢だった気象予報士になりました。約30年間にわたって天気を追いかけてきましたが、当時と現在では体感的にも気候が変わっているのを実感します。特に気温の上昇と短時間豪雨については気象庁のデータからも増加しているのが分かります。気象災害で被災した方は口をそろえて「これまで経験したことがない大雨が降った」と言います。気候が変われば天気も変わります。

私が住む愛媛県では平成30年7月に発生した平成30年7月豪雨（西日本豪雨）によって大規模な浸水被害や土砂災害が発生しました。さまざまな地点で過去最高の降水量を記録し、各地に大きな被害をもたらしました。これからも気候変動によって豪雨が増加し、経験したことがないような豪雨災害に見舞われるでしょう。

ただ1つ言えることは、地震や津波災害と違って気象災害は命を守ることができる災害だということです。気象災害が発生する前には気象庁が気象情報や警報を発令し、予想される被害に応じて自治体が避難情報を出します。避難場所や避難ルートはハザードマップが示してくれます。これらの情報とハザードマップに基づいて行動をすれば、気象災害から確実に命を守ることができます。

天気と共に人生を歩んできた私にとって、天気が原因で人が亡くなるのはこの上なく辛いです。晴れには晴れ、雨には雨、風には風の良さがあり、梅雨前線・台風も大気や海水が作り出す壮大な自然現象です。私の理想はどんな気象現象とも共存できる社会になり、気象で命を落とす心配がなくなり、気象を心から楽しめるようになることです。

気象災害から命を守るために、もっとも効果的だと感じる防災対策は「気象に興味を持つこと」です。私は子どもの頃から気象に興味を持っていたことからこそ、気象現象の素晴らしさと怖さの両方を知っています。たとえば、「愛媛県に過去にないような発達した線状降水帯が発生しているので怖い」、「この勢力で愛媛県に近づいてくる台風は過去に経験がないので危ない」などです。この知識や経験こそ気象災害

から身を守るために欠かせないものです。1人でも多くの人に気象に興味を持ってもらうことが防災につながります。

「どうしたら気象災害から1人でも多くの命を守ることができるのか?」、「どうすれば気象の素晴らしさと怖さを伝えることができるのか?」と思っているときに、地元の方に声をかけてもらったのが伊予市の消防団でした。「これだ!」と思い、二つ返事で入団しました。

入団した後で消防団の役割は「消火、救助、大規模災害で住民を守ること」だと知り、「自分のような志で入団して良いものなのか?」と思いましたが、しかし、消防団に入団したことによって地域とつながる機会が増え、愛媛や伊予市の気象について地域の方や学校、行政の方に伝える機会が増えました。また地域の方の温かさに触れ、伊予市に住んで消防団に入団して本当によかったと実感しています。そして伊予市を気象災害から守りたいという気持ちがさらに強くなりました。

私は気象予報士として伊予市の消防団員として、伊予市を日本で一番気象災害に強い町にしたいです。そのためにも消防団活動に力を入れ、地域の方との

つながりを深めて、気象の素晴らしさと怖さをどんどん広めていきます。それが私にできる地域防災です。

これからも伊予市の消防団員として地域防災に尽力して参りたいと存じます。



地域に根差す 消防団であるために

千葉県 館山市消防団

川名 まひろ

今回もきっと大したことはないだろう…

令和元年の台風15号が千葉県の房総半島に近づいてくる中、どこかそんな風に思っていました。しかし、台風15号は後に令和元年房総半島台風と呼称が付くほどの強い台風でした。千葉県内各地で最大瞬間風速が観測史上1位を記録するほどの暴風を伴い、深夜から明け方にかけて房総半島を通過していきました。

深夜に停電になりましたが、それも直に復旧するだろうと考えていました。

台風が通り過ぎ、朝になって外に出て初めて、大変なことが起こったのだと知りました。

電柱が何本も倒れて道を塞ぎ、電線はあちこち切れてぶら下がっていました。看板も木も倒れ、大きな鉄くずや、トタンが散乱していました。見慣れたコンビニやドラッグストアもガラスが全て割れ、ガソリンスタンドの屋根は落ちて、倒壊している建物やガラスの割れた車をたくさん見ました。通り沿いの家屋の多くは屋根が飛ばされていました。

一夜にして変わり果ててしまった景色を見て、このとき改めて自然災害の恐ろしさと、自分の考えの甘さを痛感することになりました。

少し話は戻って、2018年の4月。

この台風から1年半前に、館山市消防団に女性消防部が発足しました。

最初に消防団に女性部を作るからやらないか?と声を掛けられたときは、断るつもりでいましたが、現館山市消防団長である吉野団長にお会いして、意識が180度変わりました。

「もし大きな災害がきたら男性団員はがれきの撤去や行方不明者の捜索で外に出てしまう。市の職員だって何人来れるかわからない。避難所で支援を待っているのではなくて動いてくれる女性団員が欲しい。」団長の話を聞いて、もし災害が来たら避難所で誰かの支援を待っていただろう自分を想像して、恥ずかしい気持ちになりました。誰かがやらなきゃいけないのなら自分たちがやろう。そんな思いで立ち上がったのがきっかけでした。

発足後私たちは、まずは自分たちにどんなことができるのか話し合うことから始めました。

消防団活動をやるとはいったものの、私を含め女性団員のほとんどが子育て中のママさん達。なかなか思うように集まらないこともありましたが、今後女性が活躍しやすい組織を目指して、「家庭を優先しながら、できるときにできることを全力でやろう」をモットーに活動をしてきました。

しかし、災害時にどのように動くかということまでは決めていませんでした。

そんな中で来てしまったあの台風…。被災後長引く停電の中、今私たちにできることは何か、考えたのは災害が起こってしまった後でした。

これは最大の反省点でした。

ありがたいことに全国から館山市にたくさんの支援物資が届きました。水や食料、生活必需品などが市内の公民館に配られ、たくさんの人の生活をつなぎました。

私たちは被害の大きかった地域へ行き炊き出しをしたり、独居のお年寄りのお宅に安否確認を兼ねて個別訪問し支援物資を届けるなどの活動を行いました。普段の会議や訓練などにはなかなか活動に参加できなかった団員も、この時はほぼ全員が何かしらの活動に参加し力を発揮してくれました。とても心強く感じたのを覚えています。

事前の訓練やマニュアルが一切無い中で、私たちが活動できた理由は、ひとつは女性団員が皆自分たちにできることがあれば何かしたいという強い気持ちがあったこと。そしてもうひとつは、私たちの何かしたいという気持ちに、消防団幹部や館山市が動いてくれたことです。

団長はすぐに「俺が責任持つからやってみろ!」と行ってくださり一緒に考えてくれました。館山市もすぐに支援物資を持ち出す許可と車両を使う許可をくれ、災害対策本部の会議にも参加させていただき情報も共有することができました。

もちろんうまくいかないことや反省点も多くありましたが、行動できたからこそ次へつながる反省もできたと思うのです。

被災後に海岸が漂着した災害ゴミで埋め尽くされ消防団で海岸清掃を行ったのですが、このとき消防団の呼びかけに対して、たくさんの市民が協力し一緒になって海岸清掃を行うことができました。自分たちの町は自分たちで守る。災害時に地域の人たちが協力し合っ立ち向かえる仕組み作りこそ、災害に強いまちづくりであり、その一端を担える消防団でありたいと感じました。

吉野団長からは、「行政が動脈ならば消防団は毛細血管だ」といつも聞かされています。

これからの消防団のあるべき姿は、その言葉の通り、行政と協力し行政の手の届かないところを消防団が担っていくということ。また「誰かがやらなきゃいけないのなら自分がやろう」と決断し消防団に入団したことに誇りを持ち、日々地域に対する愛情と感謝の思いを持ち続け、今までと変わらず地域に根差した活動を心がけていくことと思っています。



女性消防隊の可能性 消防団活動で紡ぐ縁

新潟県 南魚沼市消防団

岡崎 理香

私が消防団に入団した理由、それは第24回全国女性消防操法大会へ出場するためでした。

「あなたのその足が必要なの!」隊長からの熱烈なオファーと度重なる猛プッシュに根負けして入団。

大会の成績は自分たちの思う結果には結び付きませんでした。この大会を通じ男性団員と消防職員、そして女性消防隊が一丸となって団結できたことで、消防団の素晴らしさを改めて知る機会となりました。

実際に入団してみると、女性消防隊の活動は男性団員の活動と違うのだと知りました。

女性消防隊は発足当時から女性だからできる活動、自分たちが活動しやすい環境を維持するようにと、次の3本柱で行っています。

ポンプ操法を通じ規律を学ぶポンプ班。救急講習を主体とした技術班。広報活動を主体とした予防班です。団員それぞれが活動しやすい班に属していますが、他の班活動へも積極的に協力しあう活動体制をとっています。

いざ活動に!と、女性消防隊会議の議題でコロナ禍でも何かやれることはないか、新たな活動を考えていた時、JAみなみ魚沼の女性部が防災意識を高める防災運動会を毎年開催していることを知り、この活動こそ女性消防隊として広報活動に行うべきだと提案し準

備に取り掛かりましたが、開催前でコロナの猛威によって開催中止。

落胆する中、困難な時こそできることがあるはずだと立ち上がり、JAみなみ魚沼女性部と共に知恵を絞って、防災十カ条を手ぬぐいにしてはどうかという案が生まれたのです。

それに加え、いざという時の持ち出し品がよくわからないから備えが難しいとの意見もあったので、持ち出し品リストを付けて活用してもらえれば、より防災意識が高まると考え、両方をコラボ作成することになりました。

十カ条や防災の知識は消防職員から監修してもらい正しい知識のもと作成。しかし、言葉がまじめすぎて堅苦しい印象になり、それなら親しみのある「南魚沼の方言バージョン」にして、地域の特色も織り交ぜながら、思わず声に出して読んでみたくなる防災手ぬぐいが完成しました。

家に飾って置くことや、ハンカチ代わりにできるだけでなく、防災にも活用できる優れものでもあるオリジナルの防災手ぬぐい。そして、非常時持ち出し品リストは一般、女性、高齢者用など性別・年代別の他に、緊急連絡先もわかるようにしました。

「防災手ぬぐい」と「非常時持ち出し品リスト」の

防災セットが完成!お互いの部員の反応は、「身近な言葉で読みやすいし、持ち歩いていい!非常時に必要な物が一覧になってわかりやすいね!」と、喜んでいただけました。私たちだけではもったいないと、令和3年度南魚沼市で開催する「第4回新潟県女性消防団員活性化大会」のお土産に付けることに決定。しかし、残念ながらコロナで開催は中止に。皆さんの前でお披露目できる機会も失ってしまいました。せめて作成した防災セットだけでも、南魚沼市に来るはずだった女性消防団員の方々にお届けしようと、(公財)新潟県消防協会のご協力をいただき、無事お届けすることができました。この活動を通して実際に開催できない悔しさはありましたが、お互いの活動を知る機会が持てたこと、女性消防隊に興味を示してくれる人が増えたことが何より嬉しかったです。

ちょっとしたご縁から入団した消防団。はじめは、ポンプ操法大会へ向けての入団でしたが改めて消防団の活動は、大切な地域活動の一つだと実感する出来事でした。

そして、消防団としての活動を経験していく過程で「大切なことを伝える」このことに、やりがいを感じることができました。

女性消防隊として、スタートしたばかりの私ですが、

地域になくてもならない南魚沼市消防団女性消防隊と言われるように、今度は伝える側へ立ち、一つ一つの消防団活動を通して、人と人との縁を大切に紡いでいくことで、太陽のように地域を明るく照らす存在になりたいと思います。



仕事と消防団活動

石川県 金沢市第三消防団

奥村 悠祐

みなさんはワークライフバランスという言葉をご存知でしょうか？

ワークライフバランスとは、「生活と仕事の調和」という意味だそうです。厳密に言えば、仕事と仕事以外の私生活との調和をとり、その両方を充実させる働き方・生き方のことであり、仕事がうまくいっていると私生活でも心にゆとりをもつことができ、また、私生活が充実することで仕事のパフォーマンスも上がるという好循環が期待できるそうです。

私は現在、病院職員として医療に従事しています。日常診療はもちろんのこと、急な疾患や外傷などで病院に搬送される救急診療にも携わっています。また、大規模災害時に派遣される医療チーム、いわゆるDMATにも登録しており、日々災害時に備えた訓練や活動を行っています。

災害医療でも日常診療でも、医療活動ではそのチームの指揮命令系統というものが非常に重要視されません。

私が救急外来を担当していた時のことでした。救急搬送されてきた患者の容態が急変し、意識レベルが低下、生死に関わる重篤な状態に陥ったのです。その場にいたスタッフはみんな大慌てで対応に追われま

した。その時、医師から「焦るな・・・落ち着け、みんながしっかりと役割を果たせばこの人の命は必ず救える。」

その言葉を信じ医師の適切な指示の下、互いに連携協力した結果、その患者は一命をとりとめることができましたのです。

私はこの医療活動での経験が私生活の一環で参加している消防団活動にもリンクしていると感じています。

消防団活動は、地域活動のほか災害活動にも従事しています。

いざ火災現場に行くと、燃え盛る火のさなか、焦る気持ちと緊張感とで交錯する私を、百戦錬磨の分団長そして先輩団員が冷静な判断で活動の指示、サポートを適切にしてくれるのです。

私は、医療活動と消防団活動の指揮命令系統および連携協力に加え、人と人との信頼関係の大切さについても活動を通して習得することができました。

医療活動では医師が適切な判断をし、チームとしてどう動くかということを確認することで効率的な医療活動に繋がります。消防団活動においてもそれぞれの階級に応じた役割があり、組織体制に基づく指揮

命令系統が機能することで災害活動がスムーズに行えると感じています。

私は災害医療に携わる前から入団しており、入団時には、今時このような上下関係のある縦社会の組織が存在するものなのかと思っていました。しかしながら、この組織は災害活動において理にかなっていることを医療活動を通して知ることができました。

このように、私は自らの仕事と消防団活動がとてもよくリンクしており、仕事での知識や経験が消防団活動につながることもあったり、一方で消防団活動で得られた知識、経験が仕事に役立ったりと非常に恵まれた環境にいます。

ワークライフバランス、医療従事者としての仕事と消防団活動は、その相乗効果により、一層充実感が増し、さらに自身の成長の場となっています。

私は今後もワークライフバランスを意識して、やりがいを持って消防団活動を続けていきます。



消防団活動で得たもの

山梨県 南アルプス市消防団

橘 博史

「悪いけど、今度消防団に入ってくれんけ?」

職場の先輩から誘われ、消防団へ入団したある日。

「楡形地区出火報」

地元の火災に慌てて現場へ駆けつけた私の目に飛び込んできたのは、住宅から噴き出る炎でした。住宅が燃え、悲鳴をあげる関係者のいる火災現場で、手際よくホースを伸ばし放水準備をしている先輩団員の姿には鳥肌がたちました。気持ちが高ぶり、焦っていたのか、何をやるべきかわからずいた私に

「ホース持って走れ!」

先輩団員の指示で我に返り、懸命に行った初めての消火活動は、今でも忘れられません。

それから数年が経ち、市の操法大会に三番員として出場することとなりました。早朝からの練習は、思っていた以上に大変で、朝、練習をして仕事へ行き、布団に入ったと思ったらもう練習。体が休まる暇もなかったのですが、「練習をやめたい」と思ったことは一度もありませんでした。

それは、家族、仲間と多くの方の支えがあったからです。

操法を通して得た、規律、基本操作、そしてなにより、団員との「絆」は、私の生涯の宝となっています。

消防団員として十年。去年は部長として、部を率

いる立場を務めました。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響で、消防団活動を制限することになりました。

活動を制限することとなっても、災害は待ってくれません。地域の災害に備え、団員が感染しないよう、細心の注意を払いながら、活動を行いましたが、様々な意見がある中で、どのように活動することが良いか何度も迷いました。

そんな自分を支えてくれたのが、一緒にやってきた団員、そしてこれまでの消防団活動を通じて知り合った方たちでした。多くの仲間の支えがあったことで、部長の任を無事務めることができました。

これらはどれも消防団をやっていないければ経験できなかったことです。また、この経験が、自分自身を成長させてくれたと思っています。

「消防団は大人の部活みてえなものだ」

入団当初から私を指導してくれた先輩がよく言っていました。

目標に向かって厳しい訓練を重ねる中で自身を磨き、仲間と団結を深めていく。

大人になった今、そのような場はあまりないのではないのでしょうか。

普通に仕事しているだけや、家にいるだけでは得ら

れないことが消防団活動では得られると思います。

また、地域とのつながりという意味でも、同じ地域に住む多くの人と知り合えることは、地域のつながりが希薄になったといわれる今、とても大事なことだと思います。

入団当時は、消防団のことが何もわかっていなかった私ですが、様々な経験を経て、ここでしか得られない経験や、つながりを得ることができました。振り返れば楽しいことばかりではありませんが、消防団活動にかかわることができて、よかったと思っています。

まだ、消防団を経験していない皆さん

是非、消防団を経験してみてください。

そして、地域の人と人のつながりで、「やりがい」を感じてください。

かけがえのない、仲間と共に。



伝えたい！ 私たちの声を！

長野県 大町市消防団

奥村 照美

何故この会議が立ち上がったのか！

それは、県内で女性団員として活躍している仲間と話すと、多くの仲間が同じような悩みを持っており、「何か行動しなくては!」と思ったのがきっかけでした。

中でも一番多く聞かれたのが、「私たちの声が消防団の中でなかなか共感してもらえない。」とした声でした。

男性社会、縦社会が色濃い消防団の中、もっと横の繋がりができて何でも話し合える場があり、風通しが良くなればいいなという思い、また、女性の視点を取り入れることで、男性とは違った目線で地域に貢献できることを一緒になって考えることができれば、消防団の発展に繋がって行くとの熱い思いで会の設立を仲間と呼び掛け、多方面のお力添えにより、平成30年度に「長野県女性消防団員活性化会議」の設立に至りました。

先にも述べた通り、この会議の目的は長野県内の女性消防団員が情報共有できる場をつくること、また、女性消防団員の声を形にしていくことです。

会のメンバー構成は、県内全13地区協会からそれぞれ選出された女性消防団員のほか、県消防協会役員などです。私は現在この会議の代表2名の内の1人です。

活性化会議では、まず、女性団員の現状を把握するために、県内全ての女性団員を対象にアンケート調

査を行いました。調査の結果、多くの女性団員から「活動の幅を広げたいが、どの様な活動をすればいいのかわからない。」「他の消防団の活動を知りたい。参考にしたい。」「他の団の女性団員と話がしたい。繋がりたい。」「一緒に学べる場がほしい。」などといった率直な意見が出されました。

このような意見を受け、女性団員が横の繋がりを作り、悩みなどが言え、他の団の女性団員の活動を知ることができる機会を設けることで意見がまとまりました。

また、活性化会議の代表が県消防協会の理事会にオブザーバーとして出席し、県消防協会事業に女性団員の意見を反映させていく仕組みも整備されました。

それから1年以上に渡って県消防協会を巻き込んで議論を重ね、女性団員や消防団関係者約150名の参加のもと、「長野県女性消防団員活性化大会」を開催しました。

そして、会議や大会を重ねていく中で出た内容をいくつか挙げると、女性団員からは、「今まで言えなかった悩みなど、この会議があることで打ち明けることができ、解決策ができた。」「令和元年東日本台風における女性団員の活動を知ることができたり、他の女性

団員の活動内容が聞けて良かった。」「災害時、消防団員としてどんなことができるのか、コロナ禍での救護活動、その他についても学びたい。」などの声が聞かれます。

また、県内消防団幹部、担当者からも、「今まで知らなかった女性団員の想いが聞けて良かった。」というポジティブな声を頂けたことや、「団員確保問題や、他の団の女性団員の活動を知りたい。」などという課題が分かったことは、今後につながる大きな成果だと思っています。

女性目線、男性目線での考えを共有しながら話し合えることは、相乗効果以上になっていると思います。

この会議があることで、今までクローズアップされなかった消防団員の声が届き、上下関係なく話し合えることで消防団環境が良くなっていくと思います。

この会議は、トップダウンではなく自分達が主導になって考え行動に移していけるところが、今までの発想とは違い大きな可能性があり、この先どんな展開になっていくのか楽しみです。

そして、私たちの意見を発信していければ女性団員(消防団員)の活動が活発になっていくと思います。

何事においてもそうですが「経験に勝るものなし!」で、この会議を活用して様々な事例、その他を共有していくことができれば、女性団員を含め消防団の活

動の幅は広がります。

こうした取組で学んだことを、各地区代表が地区協会、団に持ち帰りフィードバックすることで、私たち消防団員が地域住民に寄り添う防災リーダーとしての役割を担っていくことにも繋がり、消防団のイメージアップにも繋がればと思っています。

何をするにも「会話、対話が大切!」これからもこの会議を通じて「伝えたい!私たちの声を!」



消防団活動と地域防災 ～持続可能な生活のために～

三重県 鈴鹿市消防団

中川 洋香

こんにちは。

私は、モータースポーツの町、鈴鹿市で女性消防団HIまわり分団として平成9年から活動しております。きっかけは鈴鹿市の広報誌に掲載されていた「女性消防団員募集」の記事でした。市民の皆様のお役に立てるならと思い、応募をさせていただきました。入団後、手作りエプロン人形を用いての啓発人形劇、救急法の指導など様々な活動を行ってきました。人形劇を通じて、子供達と交流するのは楽しく、また救急法の指導では感謝されることもあり、やりがいを持って活動していたのですが、ずっと心に引っかかっていたことがありました。

それは、阪神淡路大震災の時に自分が以前住んでいた家が倒壊し、発災が数年ずれていたら自分が下敷きになっていたという経験から、災害・防災のことについて学びたいと思っていたことです。ある日、活動服姿の私を見た近所の方から「洋香ちゃんが消防団なら、災害があった時に安心やわぁ」と言われました。折しも東日本大震災の直後で、消防団の活動がクローズアップされた時期でした。その言葉に災害・防災のことについて学びたいという思いが蘇りました。

そんな思いを実現させるため、またご近所の人に本当に安心してもらえるために、平成25年に三重大学の防災人材教育のプログラム「さきもり塾（現みえ防災塾）聴講コース」を受講し、翌年にはさらに期待に応えられる消防団活動が出来るようにとの思いから、応用コースを受講しました。応用コースでの研究テーマは鈴鹿市の小学校のPTAを対象にした避難所の認知度についてでした。救急法の指導で訪れた小学校で、救急法を受講されるPTAの方々にアンケートをお願いしました。市内の全ての学校に私が行くことは出来ませんでしたが、他の女性団員の皆さまが快く協力してくださり、市内30校中29校でアンケートを実施することができ、1,311枚の回答を集めさせていただきました。当時ご協力いただいた女性団員とPTAの皆様には大変感謝しています。アンケートの結果、想像した以上に避難所について認識されていないどころか、すでに市からハザードマップが全戸配布されているにもかかわらず、危険箇所の地図が欲しいなどの要望がたくさんありました。

そこで、行政は多種多様な情報を発信しているが市民の受け取り方は様々で、私達がその間を繋ぐことが出来るのではないかと考えました。

その後、自分の地区の防災訓練に講師として呼んでいただけるようになり、救急法についての説明や、自分の近所の人と顔見知りになる大切さや平時の食料備蓄の方法等を防災訓練でお話させていただきました。しかしそこで見たのは、「近所の人顔知らんし」「食いもんはおかあちゃんがやっとするで」「いつ起こるかわからんし」と、関心のない姿でした。そんな姿を見て、防災の知識はもちろん必要ですが、いつ来るかわからない災害に対してだけ特別な準備をするのではなく、いまある生活を持続可能にするための考え方を持っていただけるにはどうすればいいのかとの思いが生まれました。

「わかっているけどなかなかねえ」ではなく、寒くなってきたら毛布を準備するのと同じように、災害だけでなく、なにが起こっても生活を持続出来るようにする。避難所などで急に共同生活を送ることになる前に顔見知りになっておく。おかあちゃんが料理出来ない時に困らないよう食事のことも知っておく。突然自宅に住めなくなった時にどうやったら生活を継続することが出来るかを考えておく。そんなきっかけづくりのお手伝いを実践し、行政と市民の皆さまを繋いで行ければと思います。



機能別消防団（市役所分団）として幼少期からの憧れが現実に

大阪府 大東市消防団

武内 義幸

【「市役所分団にあっては消火栓部署!並びに火災建物西側開口部への放水をお願いします!!!」これが常備消防指揮隊から市役所分団への初火災現場での指示内容でした。】

全国の市区町村でそれぞれ事情は異なると思いますが、大東市でも地域防災の主力を担ってきた消防団も、近年の消防団員のサラリーマン化、地域コミュニティーの衰退等により、新人消防団員の確保が非常に困難な状況にある中、廃団になった分団もありました。そのような中で考案されたのがわれわれ「市役所分団」です。機能別消防団制度は2005年に近年の状況を鑑み、新たな団員確保に向けて打ち出された施策であり、大阪府下においても市町村職員における機能別消防団は少なく、大東市では令和3年4月に私を含め、選りすぐられた精鋭10名による「市役所分団」が発足しました。

実は私、小学生時代、帰宅途中に偶然火災現場に遭遇したことがあり、その時の消防士さん達の、炎に立ち向かう消火活動や大声で避難誘導している姿を間近で見て、「めっちゃくちゃ格好いいな!自分も大人になったら消防士になりたいな!」という思いがあったのですが・・・現在の私はしががない市役所職員です。

そんな幼少時代の憧れから、ひよんなぎっかけで消防人生を歩ませていただくことになった私にとって、4

月から始まった訓練は希望と不安でいっぱいでしたが、そのような気持ちも最初だけで、すぐに地獄に変わりました。普段から全く何の運動もしておりませんでしたので、準備運動の流れからの腕立て伏せ100回、腹筋100回、スクワット100回。この時点でダウンです。しかし厳しい訓練は、容赦なく私に襲い掛かってきました。肩にホースを担いで、階段の昇降やホース延長訓練、重たい要救助の人形を担ぎ、「絶対落としたりあかんぞ!死ぬ気で丁寧に搬送せえ!」と鬼教官みたいな激を飛ばす消防隊長。「もう43歳やで、何歳まで怒鳴られなあかんねん。」と心の中で思いながら、何度も挫けそうになりました。正直本当にきつくて何度かトイレに駆け込み嘔吐したこともありますが、不思議と辞めたいと思ったことは一度もありませんでした。それは、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、忙しい日々を送られている最中でも、私たちのために時間を割いて訓練をしていただいている常備消防の皆さんの厳しさの裏にある温かさで、私たち市役所分団への期待を、常に感じる事ができたからです。

そしてついに初出場の日がやってきました。現場は一般住宅火災。燃え上がる炎で騒然とする現場では、大勢の人が動いていました。初めて見る炎に言葉を失い、一瞬頭の中が真っ白になりましたが、冒頭で

お伝えさせていただいたとおり、現場に到着するとすぐさま、常備消防の指揮隊の指示が飛んできました。消火栓部署し、初めての放水作業です。訓練とは比べ物にならない緊張感で押し潰されそうになりましたが、これまで幾度となく繰り返してきた訓練のおかげもあり、自然と体が動いたのを、今でも鮮明に覚えています。

私たち「市役所分団」は基本的には仕事時間中（9時～17時30分）の火災で、地元分団が到着するまでの繋ぎ役という位置づけですので、下手なパスを後着した地元分団にパスすることは許されません。しっかりと、地元分団が「ありがとう!助かったよ!」と言ってもらえる活動ができてこそ私たちの存在意義があるのかなと思いますし、またそうあるべきであると考えます。

まだまだ発足して日は浅い「市役所分団」ですが、私は幼い頃に抱いた消防士になる夢を、市役所職員として叶えることができました。子供からは「パパは消防士になって毎日鍛えているから、筋肉モリモリマッチョマンだね!」と、思わぬ嬉しい収穫もありました。新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、思うような訓練ができない日々が続いていますが、自宅での筋力トレーニングをはじめ、いつ来るか分からない出場に備え、今後も日々精進するとともに、幼少期に

憧れた消防人生、市民の皆様の生命と財産を守るべく、二足の草鞋を履きながら全力で頑張りたいと思います。



消防団活動を支援する

徳島県 神山町消防団

坂井 義隆

私が消防団に入団したのは平成20年5月のことでした。地元の役場に勤務していたこともあり、何度か勧誘もされましたが、私の父も消防団に所属していたこともあり、父の退団を機に入団しようかと考えていました。しかし、団員数の減少により、そうも言ってもらえない状況となり、5月に急遽入団することになりました。当時、消防団の活動といえば火災現場での消火活動ぐらいしか思いつきませんでした。平時からの啓発活動や防災訓練の実施、月2回の機器点検など様々な活動を実施していることに驚きました。また、実際の火災現場に出動したことは3回しかありませんでしたが、常備消防のみでは対応できないことを知り、消防団が重要な存在であることが分かりました。

これまで、消防団員として地域防災に携わってきましたが、令和元年度からは総務課の防災係として、公務として、地域防災に関わるようになり、消防団の事務局業務も担当するようになりました。事務局では、火災現場での対応から事後の報告書等の作成、各種訓練の計画と実施、幹部会議の開催、報酬の支払いなど、様々な形で消防団活動を支援しています。中でも、現場での対応には毎回苦慮しています。消防団に出動要請がかかる主な案件には、火災と捜索活動がありますが、毎回条件が異なるため、対応方針

から準備する資機材、人員の配置など、条件に併せて柔軟に対応する必要があります。また、本団と事務局の連携が円滑にできないと、命令系統が機能しない、長時間活動をしている団員に対する支援の遅れなど、消防活動に支障が出ることもあり、支援体制を確保することが重要となっています。現在はその部分を総務課の職員が担っていますが、人員的に厳しくなっています。職員の中には団員として地元分団に在籍している者もいるため、団活動を優先しなければならない状況もあり、支援体制の維持がより厳しくなることもあります。最前線で活動する団員の支援をどうするか、機能別団員の配置などを今後検討していかなければなりません。

その対策として、神山町では平成30年12月に「神山町女性消防隊」が発足され19名の女性隊員が新たに消防団へ加わりました。当時、入隊者がなかなか集まらず、本団幹部が個別でお願いに回ったそうですが、集まった隊員は意欲を持った方々で、後方支援以外に自分たちにできることは何か、話し合いを重ね、神山町では初となる「ラッパ隊」を編成し、式典やイベントで信号ラッパの演奏を行うなど、新しい活動にも取り組んでいます。しかし、現在は、コロナ感染症の影響により、月1回の広報活動を実施するに

留まっています。女性消防隊の存在意義を上げていくためにも、もっと活動範囲を広げていきたい気持ちもありますが、思うようにできない現状に歯がゆい思いを募らせています。

また、過疎化の影響により、団員数の減少と高齢化が進んでいます。女性消防隊の入団によって団員数は一時的に増加しましたが、その後は減少傾向にあります。団員数を維持するため、定年制度は設けていませんが、それでも5年10年後には統合しないと消防活動を存続できない分団もでてきます。そうならないためにも、移住してきた住民にも勧誘を行い、団員確保に積極的に取り組んでいる分団も存在します。移住者にとっても地域とのつながりを消防団活動を通して構築することができるため、移住者の多くが入団を前向きに捉えてくれています。昨年は新入団員のうち半数以上が移住者となるなど、一定の成果も見えてきています。

今の自分たちにできることを実践している消防団に対して、事務局として、できることは何かを常に自問自答しながら、団員が活動しやすい環境を整え、消防団活動を維持していけるように、これからも事務局業務を実施していきたいと強く思います。



消防団の必要性

大分県 宇佐市消防団

川谷 賢

私は、社会人になり、育ってきた地元のためにできることは何でもやろうと思っていました。地域の文化保存会などにも積極的に参加していました。そんな中、地元の先輩たちから消防団への入団を誘っていただき、入団を決意しました。

しかし、消防団がどんな活動をしているか、どんな方が何名くらいいるのかなど、何もわからない状態でした。そんな中、入団してすぐに、操法大会が開催されることとなりました。自分の所属する分団が、宇佐市の代表となり、私もその選抜チームの一員に選ばれました。訓練が始まってからは、他の団員の方や操法指導の方、消防署の署員の方とも親しくなり、毎日の練習が楽しくなりました。練習では、基本的な礼式の訓練、他の番員との息を合わせる事、動作をきれいにさせる動かし方、一つひとつの動作の正確さの追求など、単純でしたが、なかなかうまくいかないことがたくさんありました。そんなとき、先輩団員の方や指導員の方からマンツーマンで指導・激励していただきました。一緒に操法を行ってくださったり、自分が出場した時の経験談などを聞かせてくださったりしました。毎回仕事終わりに集まって練習を行いましたが、練習は一人でできるものではなく、沢山の方々の協力をもって成り立っていました。

操法大会当日、不運にも強い雨が降る中での競技となり、練習ではできていたこともうまくできませんでした。しかし、やり遂げたことで得た達成感と周りの方々の協力に対する感謝の気持ちでいっぱいになりました。この経験が、その後の消防団活動で大いに活かされてきました。

消防団は、地域に火災が発生した際や、地震・風水害などが発生した際に、一番に現場に到着します。消防車が到着する前の消火活動、近隣住民への避難誘導、野次馬への対処、交通整理、火災鎮火後の消火活動や河川氾濫の監視・避難誘導、風水害・地震などでの要救助者の避難補助など、地域住民の生命の安全を第一に活動を行います。

その中で大切なことは、消防団員同士の普段からのコミュニケーションがしっかりとれていることや、組織・連絡体制・器具备品がしっかりと整備されていることだと思います。

私が消防団に入って初めて出動したのは自宅のすぐそばでの火災でした。出動の要請が班長からあり、現場に急行しました。恐怖と不安でいっぱいでしたが、操法で学んだことを活かし、給水点の確保やホースの展張・消火活動などをしっかりとこなすことができました。

た。

初めての経験での戸惑いもありましたが、消防署の方が消火後すぐに帰っていったことに驚きました。しかし、鎮火後、地域の方が安心できるよう完全に火の気がなくなるまで消火活動し、最後まで見守りをすることは、消防団の大切な役目であることと、消防署の方は次の災害に備えるためにすぐ帰ることを、そのあと先輩団員の方から聞いて納得しました。火災や災害が発生することで、実際に消防団として活動し、改めて消防団の有効性と必要性を認識しました。

私が所属する分団では、年齢層も広く、若い世代の人たちも活躍していますが、全国的には消防団員の高齢化・減少が問題となっています。消防団は、高い地域密着性と大きな動員力及び即時対応力といった特性を兼ね備えており、地元を守り愛する気持ちで、地元のために尽くすことができる、地元に必要な組織です。

私はそんな消防団をととても誇りに思います。今後もこのような経験を活かし、消防団組織を維持・発展できるように、尽力していきたいと思います。

令和3年度 審査員

審査員長	
日本商工会議所総務部長	塩野 裕
審査員	
フリーアナウンサー	青山 佳世
審査員	
NHK制作局 第3制作ユニット チーフプロデューサー	大坪 悦郎
審査員	
プロレスラー、消防応援団 (一社)ニューワールドアワーズスポーツ 救命協会代表理事	蝶野 正洋
審査員	
消防庁消防団等充実強化アドバイザー	山本 みゆき

審査員長を除き五十音順、敬称略

審査員長 塩野 裕 日本商工会議所総務部長

皆様の素晴らしい意見発表を拝読する機会をいただき、感謝申し上げます。

私ども商工会議所は、全国 515 の地域で、中小企業の経営支援やまちづくりなど、地域に根づいた活動を展開しており、ひとたび災害が起きた際には、地域・企業等の被災状況を把握し、行政と連携し、経営再建に向け、資金繰りをはじめ各種の支援を行っております。このコロナ禍においては、感染防止対策と社会経済活動の両立に向けて、日々活動しております。

消防団の皆様は、火災や自然災害の最前線で、献身的に地域に寄り添った活動をされており、住民一人一人にとって大変心強い存在です。人と人との繋がり、絆、チームワークなど、「密」着した活動が消防団の強さの源泉とすることができると思いますが、このコロナ禍によって、消防団のあり方が問われ、大きく活動制約を受けていることは想像に難くありません。

今回の「令和3年度全国消防団員意見発表会」では、新型コロナにより日常の防疫という新たな課題を与えられた中で、様々な工夫をされ、精力的に活動されている消防団の力強い姿を確認することができました。今年度は、特に、コロナ禍での災害時の対応、女性消防団員の活躍しやすい環境づくり、機能別消防団をはじめ、環境の変化や時代の流れに対応した組織や活動のあり方を真摯に模索され、また適切な活動を実践されておられ、改めて、敬意を表します。

本来であれば、皆様の熱いパフォーマンスも含めて、拝見・拝聴したかったところですが、今回は感染拡大防止の観点から、書面審査のみとなりました。いずれの意見発表も、様々な気づきをいただき、大変素晴らしいものでした。全国の消防団の皆様には是非とも参考にさせていただき、各地域の消防団が今後とも、人々の安全安心を支える、頼もしい存在であり続けることを心より祈っております。

審査員 青山 佳世 フリーアナウンサー

これまでの消防団員意見発表会は、皆様のご意見や主張を、ご本人の語りを通じて思いを感じ取りながら一体で審査をするという形をとってきましたので、今回、文章だけで審査できるだろうか少し心配でした。でもいただいた文章は語りになっていて、皆さんの語り掛けが思い浮かぶような文体となっていたため、お顔も声も全く知らない中ですが、想像しながら審査をすることができました。そういえばこれまでは文章を見る機会はなかったわけですね。

消防団の意義や誇りを感じるとともに、今の消防団の抱える課題をきちんと受け止め、新しい感性で次の世代の市民に受け止めてもらえるような試みや工夫が行われていることがよくわかりました。課題解決のために女性団員自ら立ち上がる取り組みや、消防団においても女性の感性が大きな役割をはたしていたり、女性団員を慮る男性団員の思いがあったりと、まさに消防団においても今盛んに言われる「ダイバーシティ&インクルージョン」（個々の違いを受け入れ、認め合い、活かしていくこと）が進まなくてはいけないのだと改めて感じました。この歴史ある消防団という仕組みが新しい時代の変化の中でさらに重要な役割を担っていくために、時代に合わなくなった部分を変えて磨いて新たな魅力を作り上げて行く作業を、国や自治体、そして消防団の皆様で成し遂げていていただきたいと期待しています。

来年度は 皆さんの発表を直接聞き、熱い思いを共有することができるように、コロナの収束、そして安全で平和な社会でありますよう心から願っています。

審査員 大坪 悦郎

NHK制作局 第3制作ユニット
チーフプロデューサー

消防車が駆け抜けていく時、拳を握りしめ、思わず声が出そうになる。「がんばれ!」。私にとって消防に携わる人たちのイメージは、「闘い」。だから応援したくなる。

今回初めて審査員を仰せつかり、消防団員のみなさんの作品を読ませていただきました。想像もしなかったドラマの数々に思わず手を握りしめていました。

増水する河川を前に「最後のメール」を妻に送ろうとする団員。横の連携を求めて会議を立ち上げた女性消防隊。アンケートを実施し、具体的な課題を掘り起こしたチーム。気象災害から命を守るため消防団員になった気象予報士。幼少の頃の思いを胸に入団し、自分の子どもの憧れになったパパ。

火災との闘いだけではない、命がけの、地域密着の、さまざまな活動があることを知りました。

その一方で、もっといろいろなことを知りたくなりました。例えば、新しいことを始める時、周囲をどのように説得して結果に結びつけたのか。コロナ禍で活動が制限される中、どんな工夫で乗り越えようとしたのか。若者不足は分かるけど、どんな困ることが起きるのか（起きたのか）などなど。「何をした」ではなく「どうやった」とか、現場に立つ者でしか味わえない「肌感」とか、そういった情報をもっとほしい。字数制限があるのは承知の上ですが、ディテールを書き込んでもらえると、さらに説得力が増すのではと感じました。

説得力は共感を生みます。消防団員の活動はもっと知られるべきだと思いますし、きちんと発信されれば共感されること間違いナシです。そんな私も、「がんばれ!」と消防のみなさんに託すのではなく、「自分ごと」として防災・減災を考えなければと今回の作品を通して痛感させられました。

審査員 蝶野 正洋

プロレスラー、消防応援団
(一社) ニューワールドアワーズスポーツ
救命協会代表理事

まずはじめに、このたびの令和3年度消防団員意見発表会が、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から対面で行えないのは残念ですが、書面審査という形で実施することができたのは、関係各位の皆様のご尽力があってこそだと思います。

参加された消防団の皆様の意見発表の書類は、しっかりと目を通させていただきました。審査員を務めるのは6回目となりますが、今回は女性消防団や機能別消防団の方もいれば、病院職員、気象予報士の方など、消防団のすそ野は年々広がってきていると実感しました。一方で団員の活動内容も幅広くなってきており、皆さん大変な思いもされているでしょうが、その行動心理は、町を守るための連帯感、責任感等だと強く感じましたし、操法訓練の大切さもよく分かりました。

ただ、宮崎市消防団の発表内容にあった、60%以上の団員が辞めたいと感じたことがあるというアンケート結果には驚きました。確かに家族の時間を犠牲にしたり、縦社会の風潮が残っているケースもあるかもしれません。消防団の団員が減少してきているのは、少子高齢化、地域社会への帰属意識の希薄等、社会環境の変化と言われていますが、宮崎市消防団の意見は否定的に捉えるのではなく、消防団の皆さんの地域を守るための尊い活動がしっかりと評価されてほしいので、消防団の在り方をいま一度見つめ直す上で、いい提言だと思いました。

審査員 山本 みゆき 消防庁消防団等充実強化アドバイザー

消防団＝男性社会のイメージがまだまだ強い中で、女性団員の新たな活動への創意工夫と女性の視点から広がる活動の輪など今後も大きな期待を持ちました。

学校教育を通して防災の知識と技術を子どもたちが身につける「危機管理能力」を育てることは、災害が頻発する日本では急務です。その子どもたちが将来消防団員となった時には、次世代にどのような大切なことを伝えてくれるのか楽しみになります。実現してほしい提案です。

また地域のために行動したい消防団員、それを後押しする消防団長、そして消防団と関係組織を繋ぎ支援する事務局、この3つが温度差なく連携することで活動の幅を広げ、大きな力となることを私自身も消防団で経験しました。

うまく機能する消防団ばかりではありませんが、発足して1年半の館山市女性消防部が災害時活動できたことは、この連携の賜物です。活動を通して得られたものは、消防団員としてのモチベーションをあげ、今後大いに役立つと思います。また、消防団員と事務局、両方の立場から組織を支えている神山町、宮崎市の職員の方は心強い存在です。団員としての経験が、組織の質を向上させ、これからどのような変化をもたらすのかと期待が膨らみます。

そして時代と共に消防団員の生活様式や意識の変化により、活動内容や組織のあり方への考え方も多様になりつつあることを感じました。ジェネレーションギャップという言葉では片付けられなくなり、団員確保に向けては今まで以上のコミュニケーションが必要となるのではないのでしょうか。

それでもすべての発表者の皆さんに共通するのは、消防団は人と人との縁から信頼関係や絆を築き、団結を深めていく組織であり、地域との繋がりを大切に活動にやりがいを感じていることです。

皆さんの更なるご活躍を祈念いたしております。

【編】 消防庁 国民保護・防災部 防災課 地域防災室

〒100-8927 東京都千代田区霞が関2丁目1番2号

電 話 03-5253-5111(代表)

03-5253-7561(直通)

ファックス 03-5253-7576

